

《論 文》

# スポーツ人類学における〈スポーツ〉の理解

田養健太郎

## Understanding of 〈sports〉 in Sports Anthropology

Kentaro TAMINO

キーワード：身体感覚，スポーツ運動学，理解，身体文化，スポーツ人類学

Keywords: Body sensation, Sports Movement and Behavior, Understanding, Body Culture, Sports Anthropology

### 要 約

異文化理解や他者理解は文化人類学や社会人類学において重要なテーマであるが、当然のことながら、スポーツ人類学においても同様に重要なテーマである。

異文化に存在するスポーツを調査・研究する時に、「どのような立場から、どのように研究するのか」ということは、重要な課題であり、言語を異にする場合、より顕著に現れる。

さらに、スポーツを対象にする以上、スポーツは身体文化であり、眼前に繰り広げられるスポーツ（身体文化）や、インフォーマントの「語り」を調査者が「どのように受けとめるか」、あるいは「受けとめることができるか」ということは、研究者にとっての生命線といえる。

これまでのスポーツ人類学研究において、スポーツの「技術」については取り扱われたことがあったが、実際にスポーツをしている実施者と研究者である調査者のお互いがどのように、スポーツを理解しているかということについては検討されておらず、本当に実施者が感じていることと調査者が理解したことが一致しているかどうかは確認されていない。つまり、これまでは研究者である調査者はすでに分析する立場として、「スポーツを理解できる者」という暗黙の了解があったといえよう。

スポーツという「現象」を機械論的に捉えるのではなく、ゲシュタルト（Gestalt）として運動を捉え、それによって、全体論的に理解することができる。

運動ゲシュタルトは、「自己運動と言い換えてもよいが、私の運動感覚能力によってしかとらえられない意味構造をもっている」<sup>14)</sup>と述べられるように、個人的感覚の範囲でしかとらえることができない。しかしながら、この運動感覚能力を持つことが調査者にとって重要であり、スポーツ経験者の特長といえる。

それによって、スポーツを再構成するとともに、その動きを理解することができるのである。と同時に、現象としてのスポーツを理解する上において、運動ゲシュタルトをまず理解するとともに、自らの身体、感覚について理解しておかなければならないと指摘できる。

本研究では、「スポーツ」という現象を身体感覚のレベルでいかに調査者が理解（解釈）するの

か、スポーツ運動学の知見を踏まえつつ、検討することを目的としたが、検討の結果に以下のようにまとめられよう。

- (1) スポーツ人類学では文化人類学的フィールドワークをこれまで模範としてきたが、スポーツ人類学に固有の視点がなければ、スポーツ人類学と文化人類学に違いはない。
- (2) スポーツを身体感覚のレベルで理解するためには、スポーツ実施者と調査者の関係において、スポーツ経験の有無が重要な要素である。
- (3) 運動ゲシュタルトによって、調査者はより深くスポーツを理解することができる。
- (4) スポーツ人類学は研究対象としてのスポーツの運動形態を意味構造の視点から捉えることにより、その独自性を示す可能性をもつ。

## 1. はじめに

異文化理解や他者理解は文化人類学や社会人類学において重要なテーマであるが、当然のことながら、スポーツ人類学においても同様に重要なテーマである。

異文化に存在するスポーツを調査・研究する時に、「どのような立場から、どのように研究するのか」ということは、重要な課題であり、言語を異にする場合、より顕著に現れる<sup>1)</sup>。

さらに、スポーツを対象にする以上、スポーツは身体文化であり、眼前に繰り広げられるスポーツ(身体文化)や、インフォーマントの「語り」を調査者が「どのように受けとめるか」、あるいは「受けとめることができるか」ということは、研究者にとっての生命線といえる。

にもかかわらず、スポーツ人類学ではそうした議論はこれまでになされてこなかった。では、親科学のひとつである文化人類学ではどうかというと、「異文化を理解する、他者を理解するとは、一方の極では、対象とする文化の異質性、相手との意思伝達の低さを理解するに留まる場合もあろう。分からない、到底分かりあえない、ということが分かった、という水準である。逆の極として、本当に相手が理解できたなら、それはもはや他者でも他人でもなくて身内であり、

理解できるかぎり、それはもはや異文化と呼ばれるにはふさわしくない、という水準も想定できる。そしてその際には、かつては自明であったはずの自己が、かえって理解不可能でよそよそしい他者へと変貌し、内なる異文化の発見に驚くこともあるだろう。」<sup>2)</sup>と述べられているように、文化人類学では異文化理解を自己-他者関係での議論がなされてきたが、自己や他者を成立せしめる「身体」や「身体感覚」については、スポーツ人類学同様十分に議論されていないといえる。

しかし、スポーツ人類学がスポーツ科学の一領域である以上、「身体感覚」をどのように理解するかは、重要な課題であるといわざるをえない。

なぜなら、スポーツを研究対象にすれば、自ずとスポーツ文化の中心に位置する「身体」を理解する必要があるからである。

とはいえ、こうした課題は、これまでにスポーツ人類学が扱ってこなかっただけであり、スポーツ人類学と同じく、スポーツ科学を構成しているスポーツ運動学では、スポーツを行って得た感覚をいかに他者に伝えるかという点について多くの業績が残されている<sup>3)</sup>。

そこで本研究では、スポーツ人類学において、「スポーツ」という現象を身体感覚のレベルで

いかに調査者が理解（解釈）するのか、スポーツ運動学の知見を踏まえつつ、検討することを目的とする。

## 2. スポーツ人類学的フィールドワークとスポーツの理解

これまでスポーツ人類学的フィールドワークは、いわゆる「フィールドワーク・マニュアル」<sup>4)</sup>に依るところが多かった。とはいえ、宇佐美が指摘するように、「徒弟制」<sup>5)</sup>の側面も持ちつつ、研究対象である社会に即した形で行われてきた<sup>6)</sup>。

しかし、これまでのスポーツ人類学研究において、スポーツの「技術」については取り扱われたことがあったが、実際にスポーツをしている実施者と研究者である調査者のお互いがどのように、スポーツを理解しているかということについては、検討されてこなかった。

言い換えれば、本当に実施者が感じていることと調査者が理解したことが一致しているかどうかは確認されていないのである。

つまり、これまでは研究者である調査者はすでに分析する立場として、「スポーツを理解できる者」という暗黙の了解があったといえよう。

金子の「運動感覚能力の伝承」はまさにこの点において、スポーツ人類学に大きな意味を持つ。スポーツを行うことで得た「感覚」（コツ、カン）を他者に伝えることは、逆に研究者はそれらの「感覚」をつかむことができると推察されるからである。

一方、これまでのスポーツ人類学では研究対象である「スポーツ」についても、厳密に規定するような動きはなかった。

近代スポーツや民族スポーツ、あるいは子ども

も遊びやアニマル・スポーツと呼ばれるものまで、スポーツの範疇で取り扱われてきた。これは、研究の範囲を広げる上でも、ある程度の研究蓄積がなされた後に、定義付けしていく上でも有効な手段であると思われるが、厳密にスポーツの定義について議論されていないのが現状である。それでは、スポーツ経験者とスポーツ未経験者では同じ研究対象を同じ視点から見た時に違いがでるのであるだろうか。さらには、文化人類学者がスポーツを対象にした研究を行うのと、スポーツ人類学者がスポーツを対象に研究を行うのとでは違いがあるのだろうか。

この問いは、スポーツ人類学がスポーツ科学に属するのか文化人類学に属するのかという根本が問われるため、筆者の力量では断言することはできないが、少なくとも岸野による「スポーツ人類学は、自然人類学、考古学、言語学、文化人類学によって構成される」<sup>7)</sup>という指摘に従えば、スポーツ人類学は人類学とスポーツ科学の両方にまたがる学問であると位置づけられ、文化人類学とは異なる部分があることになる。

そして、そうであるならば、研究方法であるフィールドワークそのものにスポーツ人類学の特徴があるということになる。

しかし、ここでも、これまでのスポーツ人類学では、文化人類学的フィールドワークを踏襲してきたこともあり、現在のところ、明確な違いを出すことは難しい。

したがって、現時点におけるスポーツ人類学に固有のフィールドワークとは、フィールドワークを実施する際の「方法」ではなく、「視点」に見いだすことができよう。

ここでいう「視点」とは先述したように「スポーツ」をどのように理解するか、あるいはで

きるかということになる。

そこで、次に実際の事例を挙げ、いかにスポーツを理解するか、あるいはできるのかについて、検討を加える。

### 3. つくまい 撞舞におけるスポーツ実施者と 調査者の関係

スポーツ人類学的調査において、調査地へはスポーツを対象として出かけるが、その多くは伝統行事やイベントで行われる。そこで、本稿では茨城県龍ケ崎市で行われる「撞舞（つくまい）」を事例として、スポーツ実施者と調査者の関係からスポーツの理解の仕方について検討する。

#### 1) 撞舞の概要

撞舞は、毎年7月27日に行われて（写真1）、400年続いているといわれている伝統行事である。また、関東三大奇祭とも呼ばれている。

龍ケ崎市の他、布川、千葉県旭町や多古町、野田市でも撞舞は実施されてきたといわれているが、現存するのは龍ケ崎市と野田市のみである<sup>8)</sup>。

撞舞に関する研究は多くなされており、中でも古谷津順郎によるものが最も詳細になされているので<sup>9)</sup>、詳細についてはそちらに譲るが、スポーツ人類学的関心からいえば、そこで演じられる「舞」が注目される。

この舞は写真2～6のように、「つく柱」と呼ばれる14mもある柱を立てた先端に作られた円座の上で行われるものであり、約1時間にわたって行われる。

この間、蛙の面をかぶり、蛙の格好をした「舞男」は、逆立ちや綱下りを命綱無しで行う見事なアクロバット演技を集まった見物人に披

露する。

そして、最後に3方向に矢を放ち、その年1年の無病息災を約束して、撞舞は終了する。

当然、舞の前には、舞男のお払いや氏子集団による囃子などが行われるが、本稿では主題と離れるため、この点は他の研究および報告書にまかせることにする。

#### 2) スポーツ実施者と調査者との関係

撞舞は、その年の6月から毎週土曜日に龍ケ崎市役所の敷地内に設置された撞舞練習場でその年に選ばれた舞男と舞男候補者が練習を行う。また、現在は舞男は鳶職組合から選出されているため<sup>10)</sup>、練習場には、保存会会長や市役所職員その他、鳶職組合関係者も姿をみせる。

調査を実施するにあたって、氏子組織や保存会、市役所などの関係者に聞き取り調査を行うことは当然のこととして、練習段階からどのような練習を行っているのか観察する。

こうして練習を積み、本番に挑むことになるわけだが、撞舞の「舞」（舞い方、演じ方）は決められており、舞男はこの決められた「舞」を失敗しないように繰り返し練習を行う。

調査者はこうした練習から本番までの一連の流れをみて、調査を進めることになるが、いくら努力してもつく柱には登ることはできない。それは、舞男が神聖な存在であり、つく柱も神聖なる場所だからである。

したがって、研究の視点が「舞」に無い時は、このことは問題にならないが、舞男の身体技法や身体感覚について研究する場合、大きな問題となる。舞男が毎週練習し、身につけた技術と感覚を、調査者はどこまで理解できるのかという点である。

例えば、調査者が器械体操の経験者であるな

らば、「舞」の運動構成要素から類推できる可能性は高まるが、その他のスポーツやスポーツ未経験者では全く感覚的に理解することは不可能であろう。

器械体操経験者であっても、地上14mの高さで行う逆立ちは想像し難い。さらに、命綱無しでの綱下りでは、想像のしようがない。

あえてあげるならば、日常的にアクロバティックな動きをしているサーカス団員はかろうじて理解できるかもしれない。

このようにスポーツ実施者が体験していることを調査者は体験できない限界があることは指摘せねばならない。

しかし、一方で、スポーツ経験者は自らのスポーツ経験を抛り所に、未体験のスポーツを感覚的に再構成することはできる。これは、スポーツ技術の習得段階において、顕著にあらわれるものであり、スポーツを指導する者とスポーツを教わる者の関係性の中で認められる<sup>11)</sup>。

つまり、教わる側は、自らの身体を試行錯誤しながら動かすことで技術を習得するわけだが、その過程において手本となる動きを自らの中で再構成するのである。

この再構成の過程こそがスポーツ経験者である調査者のひとつの強みと考えられる。なぜなら、経験できない研究対象のスポーツであっても、観察することにより、自らの中で再構成することができれば、まったく同じ感覚でなくても、より近い形で理解することができると思われるからである。逆に、スポーツ未経験者では再構成するための経験がないことから、「理解」を確認することができないと推測できる。

以上のことから、スポーツを理解するためには、スポーツ実施者と調査者の関係において、スポーツ経験の有無が重要な要素であるといえ

よう。

#### 4. 現象としてのスポーツの理解

これまでスポーツは多様に捉えられてきた。それはスポーツの歴史を紐解けば、容易に理解できる。ある時代・社会では狩猟として、また競技スポーツとして、そしてまた癒しやニュー・スポーツとして捉えられてきた<sup>12)</sup>。

そうした中で、スポーツという現象をいかに理解するのかということに対して多くの示唆を与えた人物と書籍は枚挙にいとまがない。

とりわけ、金子が指摘するように、メルロ＝ポンティやフッサール、ボイテンディークなどは多くの影響を与えた。

中でもボイテンディークの『人間と動物』<sup>13)</sup>は、「運動ゲシュタルト」を理解する上で多くのヒントを与えてくれる。

スポーツという「現象」を機械論的に捉えるのではなく、ゲシュタルト (Gestalt) として運動を捉え、それによって、全体論的に理解することができる。

当然、意味論がそこで生じてくるが、本稿の目的がスポーツの理解であるため、この運動ゲシュタルトに焦点を当てることにする。

運動ゲシュタルトは、「自己運動と言い換えてもよいが、私の運動感覚能力によってしかとらえられない意味構造をもっている」<sup>14)</sup>と述べられるように、個人的感覚の範囲でしかとらえることができない。しかしながら、この運動感覚能力を持つことが調査者にとって重要であり、スポーツ経験者の特長といえる。

それによって、スポーツを再構成するとともに、その動きを理解することができるのである。と同時に、現象としてのスポーツを理解する上

において、運動ゲシュタルトをまず理解するとともに、自らの身体、感覚について理解しておかなければならないと指摘できる。これによって、スポーツがどのような意味構造を持って行われるのかが理解できよう。

こうした思考について、金子もゲシュタルトという形態学的思考から、「スポーツ人類学やスポーツ史などの研究が、このような運動形態の意味構造論の視座に立つとき、それらのスポーツ諸科学はその母体科学からの独自性を主張しうる可能性をもつ」<sup>15)</sup>と指摘している。

## 5. おわりに—まとめにかえて

本研究では、「スポーツ」という現象を身体感覚のレベルでいかに調査者が理解（解釈）するのか、スポーツ運動学の知見を踏まえつつ、検討することを目的としたが、検討の結果を以下のようにまとめられよう。

- (1) スポーツ人類学では文化人類学的フィールドワークをこれまで模範としてきたが、スポーツ人類学に固有の視点がなければ、スポーツ人類学と文化人類学に違いはない。
- (2) スポーツを身体感覚のレベルで理解するためには、スポーツ実施者と調査者の関係において、スポーツ経験の有無が重要な要素である。
- (3) 運動ゲシュタルトによって、調査者はより深くスポーツを理解することができる。
- (4) スポーツ人類学は研究対象としてのスポーツの運動形態を意味構造の視点から捉えることにより、その独自性を示す可能性をもつ。

本研究ではスポーツ運動学の知見をもとに検討を行ったが、「ゲシュタルト」概念において

心理学からのアプローチができなかった。今後の研究の課題としたい。

## 〈注記及び引用参考文献〉

- 1) 言語が異なる社会で調査を行う時、研究者は調査以前に言語の習得が必要になり、その上で、調査に入るとされている。
- 2) 杉島敬志編：『人類学的実践の再構築』、世界思想社、2001. 10, p.81
- 3) スポーツ運動学の第一人者である金子明友氏は、K・マイネルの「Bewegungs Lehre」から多くの業績を残されている。以下にそのいくつかを紹介しておく。
  - ・K・マイネル著、金子明友訳：『スポーツ運動学』、大修館書店、1981. 4
  - ・K・マイネル著、金子明友編訳：『動きの感性学』、大修館書店、1998. 2
  - ・金子明友著：『わざの伝承』、明和出版、2002. 9
  - ・金子明友著：『身体知の形成』、明和出版、2005. 9
  - ・金子明友著：『身体知の形成』、明和出版、2005. 9
  - ・金子明友著：『身体知の構造』、明和出版、2007. 8
- 4) 代表的なのは、佐藤郁哉氏による次の書籍である。
  - ・佐藤郁哉著：『フィールドワークの技法』新曜社、2002. 10
  - ・佐藤郁哉著：『フィールドワーク—書を持って街へ出よう』新曜社、1992. 9
  - ・佐藤郁哉著：『実践フィールドワーク』、有斐閣、1992. 9
- 5) 宇佐美隆憲：「スポーツ文化の翻訳と記述—スポーツ人類学の民族誌を書く—」、「東洋大学紀要、教養課程篇（保健体育）」第9号、東洋大学、1999. 3, p.71
- 6) 宇佐美隆憲：「パ・シルムにおける『わざ』の認知と分類—中国吉林省延辺朝鮮族自治州の朝鮮族—」、「アジア・アフリカ文化研究所研究年報」第29号、東洋大学アジア・アフリカ文化研究所、1995. 3, pp.1-16
- 7) 岸野雄三：「人類学とスポーツ—スポーツ人類学とは何か」、「スポーツ人類学研究」第2号、2001. 1, pp.1-27
- 8) 竜ヶ崎市史編さん委員会編：『龍ヶ崎市史』、龍ヶ崎市教育委員会、1995. 3
- 9) 古谷津順郎著：『つく舞考』、岩田書院、2002. 4
- 10) 舞男はこれまで7代が明らかにされているが、現在の舞男から薦職組合から選出されている。
- 11) 金子明友著：『わざの伝承』、明和出版、2002. 9
- 12) スポーツの歴史については、多くの書物が刊行さ

れている。

- ・稲垣正浩・谷釜了正編著：『スポーツ史講義』，大修館書店，1994. 4
- ・稲垣正浩・野々宮徹・寒川恒夫・谷釜了正著：『図説 スポーツの歴史』，大修館書店，1996. 10
- ・寒川恒夫編：『図説 スポーツ史』，朝倉書店，

1991. 6

- 13) ボイテンディク著：『人間と動物』みすず書房，1995. 10
- 14) 金子明友著：『わざの伝承』，明和出版，2002. 9, p.7
- 15) 金子明友著：『わざの伝承』，明和出版，2002. 9, p.10



写真1 撞舞の風景1



写真2 撞舞の風景2



写真3 撞舞の風景3

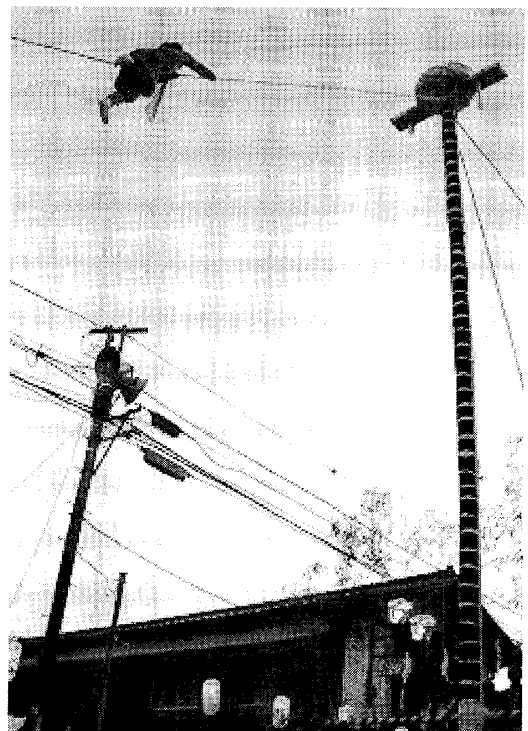


写真4 撞舞の風景4

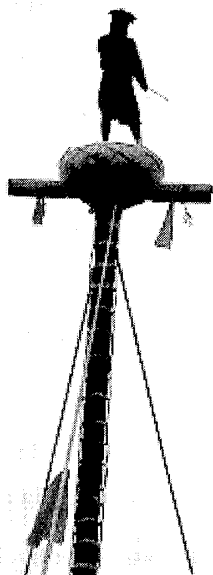


写真5 撞舞の風景5

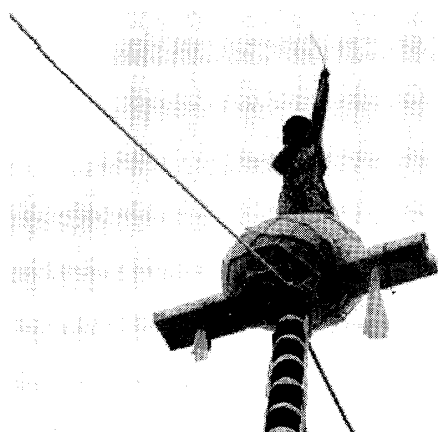


写真6 撞舞の風景6